

## 工法紹介

# 観音扉の作り方

左官吉田 吉田一正

町場の左官現場が少なくなるなか、伝統的な工法を伝えていくことが難しくなっています。今回は、数多くの土蔵を手がけている左官吉田の吉田一正さんに観音扉の作り方をご寄稿いただきましたので紹介します。（編集部）

## はじめに

伝統的左官工法では、材料の配合や、施工法など環境から生じる地域的な違いが大きい。このレポートも、関東地方の一例だとご認識いただきたい。ただし、普遍的な部分も数多く見受けられるので、改修工事などを通じて、各自研究に励んでもらえればと思う。結果として業界全体の知識が深まり、技術が向

上すれば、これより他に望むことはない。

今回は、都内某家所有の並三重両づきの観音扉を紹介する。ちなみに、並三重とは三段掛子の戸前を指し、四段のものは本三重と呼ぶ。両づきとは、扉を開いた時に肘鉄を挟んで扉と柱の掛子の追い込み面が平らに収まるものを言う。扉を開いた際、扉の内法が柱の内法から掛子の見付け分だけ外へ逃げるものを掛け違いと呼ぶ。

## 1. 原寸起こしから、冠木(兜)桁、実柱の荒付けまで

原寸を起こし、指図を書く。それをもとに、薦、石工、大工、鍛冶に仕事を注文する。

肘鉄の元に漆喰を塗り、麻苧を巻き付け伏せ込む。

冠木(兜)桁、実柱に3分程の荒縄を巻き付け、木舞とする。荒付けは、荒打ちと共に済ませておく。



## 2. 木柄の木舞掻き

木柄を釣り込み、肘鉄の芯に糸を張り、戸裏、実柱面、戸当たり(窓観音扉にはない)の6カ所に当たりを出す。また、坪、人形坪、打掛の短冊と折れ釘の元に漆喰を塗り、麻苧を巻き付け伏せ込んでおく。

木柄に2分程の荒縄を巻き、木舞とする。間には、巻き木舞を作り、貫を利用して釘止めとする。



## 3. 阿弥陀釘打ち

指図に従って仕上りの糸を張り、そこから5分控えて阿弥陀釘、もしくは稲妻釘を打つ。釘の間隔は、3寸を常とする。阿弥陀釘は、できれば和釘を使用したい。丸釘に比べて木柄を痛めづらいのと、打ち込み後の修正が容易なためである。なお、稲妻釘とは、平鋼を掛子のなりに加工したものを言う。

阿弥陀釘に身を削いだ6つ割り竹を麻苧で掻き付けていく。

